

パササンバオを訪問して

— NGOのあるべき姿を考える —

近畿大学医学部医学科 5年 中村 理美

みなさま、はじめまして。新入会員の中村です。この春 WHO 西太平洋事務局でインターンを受けることになりマニラに滞在しました。そこで、是非 HANDS が協力している場所を訪れたく、3月31日から4月3日までジェネラルサントス市のパササンバオの代表ナプサさんを訪ねました。



中村さん(右)と
助産師のハムシアさん

滞在中はパササンバオのスタッフのみなさんと共に過ごし、フィリピンの医療の実態や漁村の生活について教えていただいたり意見交換をしたりしました。私はフィリピン保健省の先生ともお話しする機会もあるのですが、その先生方からは決して聞くことのない国民の正直な意見を聞くことができました。また、彼らの考え方は私の知るマニラ在住の医師や医学生のものとは大きく異なり同じ国の中でもこんなに差があるものと驚きました。

十分な社会保障のない国では医療にたどり着けないケースが数多く存在します。いくつかのコミュニティにお邪魔して患者さんを何人か診察しましたが、病院での診察を受けることができず疾病を抱えたまま生活している方がたくさんいらっしゃいました。日本では見かけることがないであろう極めて重症の未治療の肝硬変の患者さん。病院での外科手術が最善の策と思われましたが、彼らに診察費、治療費、入院費を払う余裕はありません。家庭内での衛生が保たれないために起こる皮膚病。子どもには我慢のできる痒みではありませんが、生命に関わることは少ないため正しい治療を受けることができません。5キロの魚を獲って、2キロは自宅で食べ、残りを市場で売って家族8人やつとの思

いで生きている人が大半のコミュニティです。初等教育を受けておらず、その日暮らしを強いられている住民に保健や健康について理解を求めたり、教育をすることは難しいと感じました。しかし、同時にそれらを伝えていくことが我々の使命なのだと確信しました。

また、私が最もショックだったことはマニラに戻る日に起きたことです。その日の朝、パササンバオのクリニックに妊婦さんがやってきました。彼女は1週間ほど前に、病院で出産する費用がないので、ここで面倒を見て欲しいといいに来たそうです。しかし妊婦自身も満月かどうかも分からず、また父親も誰だか分からないとのことでした。私が空港に着いたとき、助産師たちの努力にも関わらず生まれた子は死産だったという報告が入りました。頭部に奇形があったそうで、ナプサさんによると望まない妊娠をした場合、妊娠初期に薬(抗生物質など)を大量に服用し流産や死産に追い込むケースが後を立たないそうです。コミュニティには子どもが多く賑やかなのですが、その裏にこのような悲しいケースがあると思うとコミュニティが抱える問題が改めて見えてきます。

今回は、村の保健ボランティアさんとのディスカッションや各クリニックの見学を中心に、普段パササンバオのみなさんが働いているコミュニティを見せていただきました。この4日間で学べたことは多いですが、もっともっと知りたいことがたくさんあります。そして、ナプサさんとそのご家族の暖かさが懐かしく思い出されます。年の近い助産師たちとの会話もとても楽しかったです。また、彼女たちを訪れて勉強させてもらいたいと思います。今回の訪問で、NGOのあるべき姿を考える機会となりました。本当にありがとうございました。



バイバイちゃんと。車いすは 2007年8月に日本から届けたもの(ティナガン村)